

発表者 大澤 宏之

テーマ 「一人ひとりの多様性を認め合い、個性を生かす教育」

ただいまご紹介いただきました大澤と申します。本日は発表の機会をいただき、ありがとうございます。

では、最初に私の経歴を簡単にお話しします。私は35年間、通信事業に従事しております。その中で、18年間にわたりケーブルテレビ事業の立ち上げから、今は全74局で展開するところまで事業を拡大してきました。

この仕事を通じて地域のすばらしさを知り、プライベートでは一貫して中野の地域活性化に取り組んでまいりました。中野区検定歴代第2位は、私の自慢の1つです。

ほかにも8年85回にわたり、地域団体の交流活動「つながる中野」を毎月主催しております。また、Facebookの「中野ファン」、1万1,000人の管理人を行うなど、多くの地域活動を行っております。

では、なぜ私が今、教育委員を目指すのかというところまでございます。

私は小学校のころ、九州から引っ越してまいりました。小学校3年だったのですが、方言を話すこともあり、少しいじめの対象になったこともありました。その後、中学受験をすることになり、クラスの仲間たちと遊ぶ時間がなくなりました。非常に孤立している感じのあった小学校時代でした。その中で、勉強ができることだけがプライド、そんな感じだったように覚えています。

ところが中学校に入り、苦手な理数系の科目が分からなくなり、授業ではお客さま状態になってしまいました。プライドを打ち砕かれた私は、自分は駄目な子どもだなと思うようになりました。

自分がどこでつまづいているのかを知って取り戻したい、そういうふうに思いました。勉強以外でも音楽とかスポーツとか芸術とか、そういうところに長けている仲間たちが輝いて見えました。自分も何か勉強以外に得意なものをつくっておけばよかったな、そんなことも思いました。

このような経験から、幼少期に自分が持っている得意なところをできるだけ多く見つけることが、その後の人生の糧になると考えています。

これからの少子高齢化の中、一人ひとりの子どもが社会で個性を発揮するために、自己有用感を持ち、自己肯定感を抱くように育てることが大切だと考えています。

自分を尊重することができない人間は、他人を尊重する心の余裕を持つことができない、私はそう思います。人間の多様性、ジェンダー、マイノリティへの理解を通じて、自らを尊重すること、そして、誰をも平等に尊重する考えを育むことが大切だと考えています。

では、そのために一番大切なことは何だと思えますか。

一番大切なのは、教員が一人ひとりの子どもに寄り添うために、時間と心の余裕をつくることだというふうに私は考えます。

では、現実はどうでしょうか。先日、NHKの番組でも取り上げられておりましたが、日本の教員は世界で一番多忙な状態にあります。事務的な業務、授業準備、成績処理、課外活動、生徒活動等の業務が先生の時間と心の余裕を奪っています。

授業準備アシスタント、部活動指導員などについて、地域の民力を活用し、教員の負担を軽減すること、そして、何よりもGIGAスクール構想を推進することによって教員の負担軽減と一人ひとりに最適な学習を両立することが重要だと考えています。

例えば、授業中であってもICTのツールを使って一人ひとりの理解度を確認したり、個別学習の中では一人ひとりの理解度に応じたAIなどを用いた個別学習を実施していく。そのような形で教員に過度の負担をかけずに、一人ひとりに最適な学習を実現していくことが大切であると思っています。

一人ひとりに寄り添った教育が、一人ひとりの自己肯定感につながり、それが他者の多様性を受容することにつながり、学校生活がより健全なものになる、そのことによって教員の負担が軽減され、そこでできた余裕が、一人ひとりに寄り添った教育をさらに深めることにつながる、そういう正のサイクルを教育の中につくり上げていくことが大切であると考えています。

最後になります。私はこの教育委員の仕事を通じて、学校に、そして、この中野のまちに笑顔があふれている、そういう中野のまちをつかっていきたいというふうに考えています。これまでに蓄積してきた経験を生かし、愛する中野のまちのために、これからの人生をかけて、その役割を全力で果たしていきたいと考えております。

ご静聴ありがとうございました。

区長 「つながる中野」というのを数多くやられているというお話でしたが、これはどういう思いで続けられているのですか。

大澤 これはきっかけが、同じマンションの9階に70代ぐらいのおばあさんが住んでいて、会社がりフレッシュ休暇で、休みを3週間ぐらいもらったときにそのおばあさんと哲学堂公園でばったり会って、「大澤さん、ちょっと来て手伝って」と言われたら、70ぐらいのおじいさん、おばあさんたちがその地域の子どもたちにオセロを教えている、集める大会をやっていたり、そういう講演会をやっていたり、いろいろしているのを知りました。だけ

れど、みんな高齢の方ばかりなので、新しい活動がなかなかできないとか、例えば、告知の媒体とかも紙とかだから、あまり人が集まらないとかというのがあったので、それを若い世代の人たちとつなげると、きっと後ろにもつながっていくし、大きくなるだろうというふうに思って、それで最初に、8年前に始めたのがきっかけで、そういう悩みというか、そういう課題を持っている人たちを、若い人たちも含めてマッチングしていったというふうなことをずっと8年間続けている。その活動を継承していきたい、そういう考えです。

区 長 発表の中でG I G Aスクールを契機にというお話があったのですが、G I G Aスクールは今、それを使いこなす教員の負担が増すのではないかと現場は言っているのですが、そこをどう乗り越えるのがいいと思いますか。

大 澤 これは、一過性の問題として間違いなくあると思います。そこは、私はやはりある程度専門家を入れるべきだろうというふうに思っています。それは、もしかするとその地域で、例えばそのメーカーであるとか、技術を持っている方で、リタイアされたような方にお手伝いいただくというふうなことも一義的には考えられるだろうし、もう少し大きな話になった場合には、企業に本当にコンペなり必要なのしょうけれども、お願いした上で、それで整理をしていくという、そこが重要だと思います。ハード面とソフト面、両方の整備が恐らく必要だと思います。初期の生みの苦しみは絶対あると思います。

区 長 最後に、自己有用感、肯定感の話がありましたけれども、これを一人ひとりに感じてもらえる教育というのは、ものすごく難しいというか大変だろうなと思うのですが、そこに何か秘策というのはありますか。

大 澤 私は、秘策は、これは一つ一つ積み上げていくしかないと思うのですが、やはり価値の尺度の多様なのだろうなというふうに思っています。要は、勉強ができる子どもも優れている、運動ができる子どもも優れている、あとは、音楽ができることも優れている。あと、出口の明るい目標を幾つか決めてあげるとか。例えば、中野だとサンプラザとかがあるので、音楽の世界ですご

く優れている人は、ミュージシャンの人と、例えば共演できるような権利が、最後はゴールが待っているとか、そういう何か明るいゴールを幾つかつくってあげて、そこを子どもたちが目指していきたくなるような、そういう仕組みをつくっていくと結構いいのではないかななどということを考えていたりします。

区 長 ありがとうございます。